平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	①（宇城）信頼される・選ばれる生姜産地の育成
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・JAや部会役員と連携して、GAPに関する説明会や研修会を繰り返し開催し、部会員の理解を深めながら48戸での団体認証に至っている。 ・部会内に若手を中心とした指導員を育成するなど、取組に対する自主性と継続性が芽生えている。
	・JAの園芸部の生姜専門部会としてJGAP認証取得に取り組んだことは評価に値する。 ・年齢層の幅が広く、個々の農業者の考え方、将来の農業経営への相違がある中、139戸の部会員のうち48戸で団体認証を得たことは意義がある。
	・大勢でGAPを取ったことがなかなかできることではなく、素晴らしい。 ・100%を目指さず、「とりあえずここまで」という目標は意外だった。
	・JGAP認証取得に向けた部会員との連携を図り、平成30年8月9日付で取得できたことについては、部会・JA等の協力によることが大きいと思われるが、その努力を評価する。
	・取り組みを通して若手生産者の意識が向上し、自発的な活動が見られる。 ・最初から100%を目指すのではなく、優先順位を付けて取り組んだことで実現につなげた。
	・出荷先からの要望が発端とはいえ、半分近い賛同者を得て、初のJGAP認証取得に至り、価格に反映されていることは高く評価できる。とくにスケジュールを逆算して、短期間で多くのステップをクリアした工程管理は素晴らしい。
今後改善すべき点	・経営改善面への効果など、目に見えにくい効果も含め、部会全体の認証取得に向けた取組を、継続的に続けていくための方策の検討に期待。
	・GAPを継続維持することが今後の課題である。 ・今後の取り組みとして若手の指導員ならびにリーダーがまとまり活動を行っていけるかどうかが、重要な鍵となる。
	・大勢の組合でGAP認証が取れたらすごい産地になると思u。 ・費用対効果も検討したほうがよい。
	・今後、ブランド化につなげていくには、国際水準GAPが当たり前になってきている。他作物、他部会においても、この普及成果を活用して進めて欲しい。
	・産地全体の信頼を高めていくためには、途中でGAP取得を断念した生産者や、そもそも取得を希望しなかった生産者への働きかけが課題。
	・内部監査への対応や日々の作業記録の整理の煩雑さを解消する上で、あるいは今後の審査への対応を効率的に進める上でも、IoTを活用したスマート化と連動させて行ければよい。

平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	②（上益城）品種の転換と天敵利用による夏秋なす産地の強化育成
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・不良果の発生やアザミウマ類の果実被害、生産者の高齢化などの問題を抱えたヒゴムラサキ産地の課題を適確に捉えている。 ・単位当たり収量の増加や品質の向上、売上高の増加など具体的な数字での成果が上がっている。
	・温暖化の中、良品質・安定供給の最善策は状況に見合った新新種の導入であり、農業者全体の各品目とも新品種の出現を待ち焦がれている。 ・天敵の導入は農薬価格の高騰・減農薬・農作業の軽減・安全性等の面から、非常に有効な手段だと思う。
	・部会員が減っていく中での取り組みは難しいと思うが、新しい品種の選択をしたことは評価される。 ・生産者、JA、農業普及・振興課が一体となって取り組んだことがよい。 ・効果がはっきりと見えている。
	・地域の環境に合った露地ナス（ヒゴムラサキ2号）の普及成果が成功した努力を評価できる。 ・天敵活用による防除を取り入れたことからの労力軽減が図れたことについても評価できる。
	・不良果が少ない新品種への転換を進め、収量増と売り上げ増につなげた。 ・収穫初期の台風禍後、JAとともに即座に動き、樹勢回復の対策を指導するなど生産者の立場に立った対応がみられる。
	・新たな品種や技術の導入効果を生産者が実感できている点が高く評価できる。 ・全員が効果をあげることができたのは、手厚いサポートがあったからこそで、熱意に満ちた活動は高く評価できる。
今後改善すべき点	・現在の問題に対する活動に留まっており、生産者が高齢化して6名まで減少した産地をどう維持するかの戦略検討に期待する。
	・新品種の導入においてはリスクも伴うし、失敗すれば経営状態が圧迫される。導入する側は計画性をもって作付することが大事であり、新品種に対する栽培技術の確立基準書等の早期実現が大事だと思う。
	・産地組合員の減少は産地崩壊につながるのではないか。 ・他の害虫が出てくるようになると対応が大変である。
	・今後のIPM（総合的病害虫管理）の向上からのマニュアル整備の早急な対応を期待する。
	・天敵が捕食しない害虫の防除が課題。 ・新品種への転換によるメリットをてこに、４９人から６人まで減少した生産者の増加につなげてほしい。
	・平均年齢が70歳以上という中で、新規栽培者の定着促進のために、成果をアピールしていくことが重要。 ・天敵温存植物の利用については、研究途上のものも多いことから、研究機関と最新の情報を共有し、役立ててほしい。

平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	③（県北）「明日、パラダイス塾」次世代に繋ぐ、元気な産地育成へのチャレンジ
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・アスパラガス産地を発展させるため、新規栽培者を重点指導対象として位置付け、継続して学習する場を提供している。 ・部会トップの単収が塾生であること。塾生の平均単収が部会平均単収より25%上回るなど具体的な成果が見られること。
	・担い手の確保はあらゆる手法・手段の中、農業の魅力・夢・希望を与えながら活動を行っていくことが大事だと思う。そういった中、各方面への働きかけを行っていただいていることは有意義だと思う。一朝一夕に成果は出にくいことなので血道に活動を続けていただきたい。
	・塾を通して担い手の確保や仲間づくりができている。 ・新規栽培者が増えているのが素晴らしい。
	・この塾の体制が、JA菊池営農部長を中心として根付いているため、新規就農から経営自立、高収量生産となるまでの体系普及ができていることを評価する。塾生の連携もできていると思われる。
	・塾生の平均反収が部会平均より25%増と成果が出ている。 ・3年間で14人が新規に栽培を開始するなど次世代の育成につながっている。 ・「明日、パラダイス塾」というネーミングが、明るい展望を感じさせ、素晴らしい。
	・栽培歴に応じた3コースの研修・講義を毎月開催するなど、きめ細かな指導を実施したことは高く評価できる。 ・LINEグループ形成やアスパラガス川柳・格言など、多彩な方法で生産者間の情報共有や向上心の醸成を図っていることも評価したい。
今後改善すべき点	・単収が低い生産者への技術向上など産地全体をどう向上させていくかの取組に期待する。
	・組織活動等において3～5年が一つの節目となるので気を引き締めて活動を行うことが大事になる。 ・担い手の確保には儲かる農業が身近にあり、現実味を帯びた状況の中で、農業に対する夢を持たせることが大事だと思う。
	・倒さない、枯らさない、虫を寄せ付けない努力が必要である。
	・今後の新規就農者に対して、さらに夢がもてるものである対応・普及を期待。 ・早急なる課題に対するプロジェクトチームの結成支援が必要。
	・新規栽培者の反収2ﾄﾝ以上確保という目標は未達成。反収が低い生産者への支援が課題。 ・プロジェクトチームで重点支援するとのことなので、そこに期待。
	・独り立ちコースのメニューにもあるが、県版GAP認証取得への取組もさらに進めていくべき。

平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	④（玉名）いちご「ゆうべに」の普及拡大による農家所得の向上
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・試験導入を経て他品種より高く評価されたイチゴ新品種の面積が増加する中で、地域版マニュアルの作成や集団指導を通じて高位平準化を図っていること。 ・栽培ポイントごとに新品種の特性を踏まえた育苗技術や栽培管理を徹底して指導していること。
	・新品種導入においては栽培技術等の不安がつきまとうが、JAを含め関係機関が連携し、不安解消という必要不可欠で重要なことを実践したことは、生産者との信頼関係に結び付いたと考える。
	・収益性・収量が高く、単年度で面積と生産個数が増えた。
	・県版栽培マニュアルに沿って、玉名地域で「ゆうべに」の地域版マニュアルの策定体制をつくり、農家の所得アップが図れたことについて評価できる。 ・JA、県、市町等との的確な役割・連携強化が図れていると思われる。
	・農家所得の向上に向け、単価が高い11、12月の収量が多い品種「ゆうべに」への品種転換を進め、地域全体の収益向上につながった。 ・品種転換に対応するため、普及指導員が中心となって地域版マニュアルを作成したり、研修会を開催したりして、栽培技術の高位平準化を図った。
	・栽培マニュアルでは、県版と地域版の2種類を作成し、地域版は万全の策定体制で作成され、また毎年改定協議が行われ、栽培技術の高位平準化に貢献していることは高く評価できる。
今後改善すべき点	・単収の個人差など解消や新規栽培者の発掘など産地の将来を見据えた課題への取組に期待する。
	・急激な栽培農家・面積の増加は需要のバランスを崩しやすいので注意しなければならないと思う。 ・すべての農産物に言えることですが、回避するためには個人消費量の底上げを目指すことが必要。
	・栽培技術の指導と広域で行う必要がある。（マニュアルつくりが大切） ・まだら果やがく枯れの対応が必要だ。
	・労働力確保の部分については、どの作物でも同じ状況であるが、パックセンターの運営・ほか整備等、早急なる調査研究による省力化実現に向けた普及活動を期待する。
	・「ゆうべに」の成功例を広げ、農家数の減少に歯止めをかけてほしい。 ・パック詰めなど出荷作業の省力化は今後の課題。
	・イチゴ栽培に共通の課題として、調整・出荷作業の負担が大きいこと、また労力が集中することがあり、負担の軽減や労力の平準化につながる取組が必要と思われる。

平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	⑤（阿蘇）実需者との連携による大麦の生産拡大
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・大規模地域営農法人を指導対象の中心として、麦作の基本技術の周知徹底を図り、地域の反収向上に結び付けていること。 ・JAと実需者連携のコーディネート役として、連携計画策定支援や阿蘇産大麦のPRに取り組んでいること。
	・農作物には適地適作があると思うし、阿蘇の特性を生かした適作を見抜き普及されたことは評価に値する。 ・ターゲットを農業法人等に絞り、実践されたことは進捗が早まり有効な選択だったと思う。
	・作付面積が拡大しない、反収が上がらないを解決するために、排水対策、土壌改良、適期収穫の指導を行ったことで平成30年の反収作付が拡大した。
	・JA阿蘇、西田精麦、県立農大や農業高校、農事組合法人との連携がとれて、大麦の需要拡大に結びついたことを評価する。
	・需要が拡大している大麦に着目し、主食用米の裏作として定着を図り、水田やカントリーエレベーターの利用率改善と農家の収益改善を図っている。 ・栽培技術の向上と需要拡大の両面から活動を推進し、実需者である企業とも連携し、新商品開発などにつなげた。
	・的確な指導や支援により、実需に裏付けられた大麦生産の定着や生産拡大が進んでいる点や具体的な問題点が明らかにされている点も高く評価できる。 ・二毛作での品種選択は難しい課題であり、具体的な検討が進んでいる点も評価できる。
今後改善すべき点	・阿蘇地域で大麦の生産拡大をしなければならない理由を明確にしながら、水稲との組み合わせの中で優位性を示していかれることを期待します。
	・普及活動の三年間ではなかなか完璧な成果を出すのは難しいと思う。 ・まず、賛同してくれる人から実践してもらい、あとは地道に活動を行い、賛同してくれる人を増やすしかないと思う。
	・反収の向上、作付面積の拡大を進めるために、1年2作を目指すための品種選定が必要
	・今後の普及において、緩効性肥料の導入を検討されております。たぶん一発剤によるものと思われますが、低コストを重視されるのか、省力化であるのか、生産者に向いた検討を期待します。
	・主食用米のコシヒカリと大麦の二毛作では、コシヒカリの植え付けが遅くなり収量が減少する。作付が遅くても収量確保できる業務用米との組み合わせで大麦の作付拡大を図るとのことなので、そこに期待。
	・実需者への供給不足を解決しようとする中で、需要拡大にも取り組むという意図がやや分かりにくい印象を受けたが、大麦の作付け拡大に繋がることを期待したい。

平成３０年度協同農業普及事業外部評価
外部評価委員意見書

課題名：	⑥（芦北）JA農業参入を核とした次世代につなぐ地域基盤づくり
評価内容	ご意見・アドバイス等
高く評価される点	・イチゴ観光農園開設を提案し実現するなど、農園の総合的な運営を考えた支援を行っていること。 ・天敵による病害虫防除技術導入の先導役なり、地域のイチゴ生産農家への普及が図られていること。
	・JA改革が叫ばれている中、小手先だけでなく目に見える形、また、農業者にとって必要なことの実践は素晴らしい。 ・担い手を確保するためには、しっかりした地域基盤が必要であり、新しい魅力ある経営形態を続くことが重要である。
	・JAの農業参入が次世代の地域基盤づくりになる。 ・イチゴ栽培では技術の向上を図り、収量、売り上げを伸ばす。 ・水稲栽培は規模拡大を図り、土地利用や「くまさんの輝き」などの新品種の導入
	・「ゆうべに」イチゴ栽培技術向上および経営支援により、販売額の拡大および、新規雇用と直売所等の集客に貢献できた活動については評価できる。 ・また、水稲新品種「くまさんの輝き」、「やまだわら」の作付拡大ができた結果についても評価できる。
	・管内全域が中山間地域で基盤整備が遅れており、農業・農村の存続が危ぶまれる中、県内で初めてJAが農業経営に参入。イチゴと水稲の複合経営により、従業員７人の雇用を創出。 ・安全・安心をPRするため、天敵利用で防除。害虫被害の激減につなげた。
	・中山間地での地域基盤づくりとして、イチゴ生産技術向上と土地利用型作物の複合経営の安定化について、農業革新支援センターやJAと連携し、新品種や新技術の導入指導を効果的に行うとともに、観光農園の開園を提案し、実現させたことは高く評価できる。
今後改善すべき点	・イチゴの反収向上に向けて、一日でも早い農園全体の技術力向上が図られる戦略検討を期待する。
	・多品目栽培を行う場合、作物の栽培管理が重複するので管理不足が懸念される。特に新規作物の場合、経験が未熟であり、入念な技術指導が必要である。 ・生産者とのコミュニケーションと同時にそれぞれの引き継ぎ等も十分に行い、この事業を絶やさないようにしていただきたい。
	・育苗管理技術の向上 ・直売所と地域との連携等で広がりが期待される
	・今後とも中山間地域で、高齢化が進んでいますが、地域の特産物（果樹・サラ玉など）を活用した所得の拡大、省力技術（IPMのさらなる活用等）の適用につながる普及を期待する。 ・また、新規就農者の拡大につなげる取り組みのアピールも必要と思われる。
	・作付面積のさらなる拡大と技術向上。 ・担い手確保につなげる具体策の検討が必要。
	・育苗技術、天敵利用技術、バンカー植物導入など、個別技術の向上を着実に図っていくことが必要である。とくに、環境保全技術は労力（手間）を要する場合が多いので、中山間地での担い手確保の観点からは、生産者がそのメリット享受できるような仕組みを検討することも大切だと考える。